

An abstract painting featuring a collage of various colors and textures. The composition includes large blocks of orange, grey, and white, with some areas showing fine, cross-hatched lines. A small, stylized eye is visible in the lower-left quadrant. The overall style is expressive and layered.

瑠璃唐草

baby blue-eye

山本道子

るりからくさ



瑠璃唐草

山本道子

講談社

るりからくき
瑠璃唐草

一九九五年三月二〇日 第一刷発行

著者——山本道子
やまもとみちこ

© Michiko Yamamoto 1995. Printed in Japan

山本道子略歴 一九三六年、東京に生れる。跡見学園短期大学国文科を卒業。結婚後の一九六八年から三年間オーストラリア在住。一九七一年「魔法」で新潮新人賞受賞。翌年「ベティさんの庭」で芥川賞受賞。一九七八年から四年間アメリカシアトルに暮す。一九八五年「ひとの樹」で女流文学賞受賞。一九九三年「喪服の子」で泉鏡花賞受賞。著書に「鳥のいる談話室」「闇の燭台」「愛の遠景」「微睡む女」「透明な鳩」エッセイ集「私のえらんだ幸福主義」等がある。

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二―〇一

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社

製本所——株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてに願います。

瑠璃唐草

「ホイットマンが詩のなかでいってるよ、死よりもうつくしいことが私たちの身におこるはずはない、って」

磨左夫が振り返っていった。

翼のかたちをした風が海面すれすれに舞い落ちたかとおもうと、風に掬いあげられてふわっと浮きあがった。砂浜に足をとめて風の行方を追うと空は淡い。風は冷たい。翼の風は沖にむかって遠くなっていく。中空をよぎっている一本の黒い線はびんと張った糸だ。あれが水平線までのびていくとしたら……。はるかには、沖にむかってぐんぐんのびていく一本の黒い線を想像した。「ホイットマン、知ってるだろう、百年前のアメリカの詩人、夏目漱石が日本に紹介したことで有名な」

はるかには風の行方をじっと見ている。黒い線がのびていく。あの先に磨乃がいるような気がし

てならない。あの子は翔んで行ってしまった、水平線のずっと果てまで。たった五歳でひとりきりで……。はるかには砂にうずくまった。波にむかって駆けだしたい衝動にゆすぶられたからだ。このまま砂に埋れてしまいたいと思う。ここにじっとしていればわたしは砂粒になってしまう。膝を抱えて顔を伏せると、砂粒になってしまったからだの周囲を、ひらひらとながれが飛び交っているのがわかる。風にのってそれは幼いことばになったり、鳥のような叫びになったり、どこか地底の深みからむらむらと湧きあがる気流のようになったりする。

「さあ、行こう、寒くなった」

磨左夫に腕をとられて、はるかはよろりと釣りあげられた。自分が空っぽの袋になったような気がする。どこへ行くの、と彼に訊ねてみたい。行くところなんかないじゃないの。磨乃はもう幼稚園にも行かないし、帰ってもこない。ピアノのお稽古にも行かないし、スーパの買い物にもついてこない。遊歩道の書店で少女漫画の雑誌を選ぶこともないし、海浜公園でブランコにも乗らないし駆けまわることもない。わたしの前を後をいつも飛び跳ねるようにして……。

夫婦は砂浜をゆっくりのぼった。道路ぞいの広い駐車場を横切って、フェンスを潜って横断歩道で足をとめた。背後を振り返ると、空と一枚になった海が薄白くひろがっている。磨乃が波打ちぎわにしゃがんで夢中になって遊んでいる。はやく呼びもとさなくちゃ、日が暮れないうちに。信号が変わった。

「ホイットマン、ねえ、ホイットマンがなんていってるの」

「死ほどうつくしいものはない」

「あなたの専門」

はるかにはふっと笑った。

「死がうつくしいだなんて、百年前の人間の人生がどれだけひどかったかってこと」

「詩だよ、ホイットマンを理解すれば、感傷的な賛美じゃないってことがわかるよ」

はるかは磨左夫の手をはらいのけた。

「あなたの専門を押し売りしないでよ、磨乃が死んだのは百年前じゃない、そんな昔の詩なんかもちださないでよ、あの子はまだ温ったかいかもしれない……」

はるかは棒立ちになってひと息ついた。海を背にしてなだらかなのぼり坂を磨左夫は黙って歩いて行く。駆け出して磨左夫の腕に縋りつきたいのにその氣力がない。そしてはるかにもわかってる。磨左夫も苦しいのだ。子を失った父親の背後には、無限にひろがる海も空もない。鉄板のように固い背中には彼自身の忍耐がのしかかっている。

前方に行く磨左夫がこっちを振り返らなくなったら、わたしたちはおしまいになるのだとはるかと思った。あのひとが立ちどまってわたしを待たなくなったら、あのまますたと行ってしまう。わたしたちの家の前を通り過ぎて、磨左夫はどんどん行ってしまふ。

日曜日の夕暮れ、玉置磨左夫は妻を海辺の散歩に誘いだした。磨乃を忘れるためにぼくたちはしなくてはならないことがあるのだと、彼ははるかに話した。

「グリーンフ・ワークというのをきいたことがあるだろう、喪の仕事だ。はるか、よくきくんだ、いいかい磨乃は死んだんだ、あの日、十月二十三日月曜日だ、朝九時五分。磨乃は救急車のなかで、眠るように」

事故はあけぼの幼稚園の裏門通りの車道で発生した。玉置の家から徒歩七、八分の、住宅地の

中央を走っている幅十メートルほどの車道である。幼稚園の正門は南寄りの住宅街に面している、玄関までの煉瓦敷きの通路は薔薇のアーチと垣根で飾られている。

保護者の送迎は禁止されていて園バスか徒歩にきめられているし、正門通りは行止りになっていることもあって交通事故の心配はまったくない。だから園児たちは正門通りではなにかにつけて、放たれた鶏の群れのようにのびのびと駆けまわったりするのである。そのかわりグラウンドを横切って裏門から道路に出るのは禁止されている。

黒土を踏み固めたグラウンドにはフェンスに沿って吉野桜が数本並んでいる。幹も枝もよくのびて、電線の邪魔になるかならないかといったところである。幼稚園では花見会というのが年中行事になっていて、園児たちは満開の桜の下にビニールシートを敷いて、この日は特別のお弁当を食べる。

秋の運動会と春の花見会の日には園の裏門通りに、ちょっとしたひとだかりができる。車道から一段高くなっているブロック敷きの舗道に通りがかりのひとが足をとめて、こどもたちの楽園にたい見蕩れてしまうからだ。

それは運動会が終って一月ほどの、落葉が舞いはじめた薄ら寒い朝だった。いきなり舗道に乗りあげたクレール車に撥ねられた磨乃のちいさなからだは、園のフェンスにいったんぶつかってから弾き飛ばされて、煉瓦積み of 門柱に叩き付けられた。濃紺のブレザーの下に白いスウェーターを着こんで、いつものように手をふって家を出てから七分後のことであった。突然運転手を襲った心臓発作が事故の原因だった。

このところはるか、毎晩のように磨乃の夢を見る。制服のブレザーと帽子で、磨乃は布製の

人形のからだをしていて、ぐにゃっと道端に倒れていたりする。一度人形の磨乃を見たときから、はるかかの苦しみは時間の経過と一緒に増幅していくようであった。

季節は春から夏に移ろうとしていた。時間が過ぎていくのを待つしかないよ、と磨左夫は口癖のようにいう。喪った子を祈る習慣が身についてしまうと、こんなことに慣らされていくとは、ねえ、あなた、あの子の我儘をどうしてあんなに叱ったりしたのかしら、あんなにいい子だったのに。それがこんなになたしたちを苦しめるなんて、いったいどういふつもりなんだろう、磨乃って子は。

はるかとはぼそぼそとしゃべりつづける自分に気がついていて。磨左夫が勤務先の大学へいってしまうと、ひとりきりの家の中で絶えずしゃべっていないと気がすまないのだ。しまいには喉がひりひりして、けっして正常とはいえない自分に嫌気がさしたりする。そして言葉をきいてくれるだれかがいれば、こんなふうに喉がひりひりすることもないだろうなどと分析する。言葉は声にださないから喉が痛くなるのだということに彼女は気づいている。自身に話しかける言葉は音声を失った囁きになって声帯を痛めつけているのだ。

磨左夫ははるかを友人の雨宮に会わせてみようと思っていた。雨宮圭一は同じ大学のカウンセリング研究所の助教授で、このところ一般にも話題にされるようになったグリーンフ・ワークに早くからかかわっている。愛する人間の死をどのように受け入れて、どのように喪失感から脱却していくかという過程を介護し指導する。

磨左夫が妻の独り言を深刻なものとしてうけとめるようになったのも、義妹のさつきから注意されたからだった。

広告代理店のデザイン部に勤務している叶さつきは、はるか五歳違いの独身で、両親が亡くなってからは、母親の妹である有賀須麻子と本郷弥生町の実家に住んでいた。しかしその家を処分する話がここ数年來姉妹の懸案になっていることもあって半年ほど前から、さつきは須麻子叔母をひとり残してアパートのひとり暮らしをはじめた。

磨乃に不幸がおこるまでは、姉妹と須麻子にとって家の処分が一仕事になっていた。相続は両親の遺言どおり彼女たち三人の名義になっていたが、多額な税金も隣接していた土地つきの家作を処分してなんとか片付けた。売却のため信用のできる不動産会社と渡りあったり、家を失うかわりに信州に小屋を建てて年に一度はそこで共同生活ができればなどと、女三人であれやこれやと将来を語りあっていたのである。

しかし磨乃は、母親のはるかだけではなく叔母のさつきからも大叔母の須麻子からも、日常の流れを断ち切るようにして逝ってしまったのだった。はるかの毎日がぼんやり過ぎていくように、彼女たちからもすっぱりとなにかを奪っていったようなものだ。家に関する共通の問題もこのところすっかり沙汰止みになっている。

須麻子は六十歳になる未婚の画家で、四十代半ば頃から姉夫婦の家に同居するようになったのだと姉妹はきかされていた。「ちょっと転がりこんだつもりが、とうとう叶家の座敷童みたいになっちゃったわ」というのが須麻子の口癖だった。母親の真木子が病弱だったこともあって、ふたりは小学生の頃からずいぶん須麻子叔母を頼りにしていた。

さつきは大学の磨左夫に電話をかけてきていきなり姉の状態を訴えた。

「いまお姉さんに電話したら変なのよ、声がほとんど潰れちゃってるみたいなのよ、よくききと

れないんだもの、どうしたのっていったら、ずっとしゃべってたから声が嘎れちゃったっていうの、だれかいるのってきいたら、いるわけないでしょうっていうしね。とにかくひとりでしゃべりまくってるって、気がつくといつもそうらしいって、喉が痛いんですってよ」

磨左夫は唸った。考えられないことではない。独り言をいっているのは彼を彼は知らないわけではなかった。洗面所で顔を拭きながらぶつぶついついていたこともあるし、床にワックスをかけながら、なにごとかつぶやいていたこともある。また磨乃に話しかけているんだな、と思いがら彼ははるかをちらっと振り返ったこともある。しかし声が潰れるほどの独り言となると放ってはおけないと思った。

その日彼が帰宅すると、はるかは眼に角を立てて、離れ屋に住んでいる舅への不満をいいあげた。七十三歳になる玉置策造は妻に先だたれてから、敷地内の茶室にひとり気儘に寝起きしている。離れといっても妻の紀子が茶道に熱を入れていた頃、さして広くない庭の物置を壊して増築した略式の茶室である。玄関脇のドアからひと跨ぎで行き来できるので、食事の世話にはじまつて身のまわりの世話をするには都合がいいし、別棟ではあるが老人を隔離しているといった雰囲気はまったくなかった。策造は高齢といっても耳がいくらか遠いだけで、足腰もしっかりしていていまのところ不自由を訴えることもない。舅の世話といえは世間では女にとって割りのあわない仕事と思われがちであるが、はるかはとくに負担だと思ったことはなかった。

「おじいちゃまがベルで呼びつけるからいつてみたら、そっちの家はふたりじゃ広いだろうっていうのよ、なんていいいいかわからないから黙ってた、こども部屋はどうしたかって、もう片付けたかって、……磨乃の部屋のことをいつてるのよ、あの子のものを片付けるって、ねえ、

あなた、どういふことかしら、もしかしたらこっちへ来たいんじゃないかしら、寂しいのかもしれない、たったひとりの孫がいなくなっちゃったんだもの、もとの部屋に落ち着きたいのかもしれない」

もとの部屋というのは、策造夫婦の居室だった二階の洋間のことである。ベランダつきで日当たりがよいので磨乃が幼稚園に入ったのを機にベッドを置いてひとりで眠るようにさせた。磨乃がいなくなったあと、ベッドとこども用の整理箱と、あとはいっぱいぬいぐるみが見捨てられたようにころがっている。小学校に入学したら机をどこに置こうか、ベランダにむかって座ればいつも富士山が見えるよママ、いいえだめよ、陽があたりすぎるじゃないの、と母と子で賑やかにいいあったこともあった。

「いやだわ、お舅^{とう}さんがこっちへ来るなんて、いまさらそんなのいでしょう。磨乃の部屋にあのひとが居着くなんて」

彼はそんなはるかに辟易した。これまでに策造をあのひとなどとよんだことは一度もない。

磨左夫がはるかを海辺の散歩に連れだしたのは、その週の日曜日であった。

「雨宮に会ってごらん」夕食後に彼は再びそれを話題にした。

「はるか変だよ、こっちまで息苦しくなる。雨宮は専門医だからはるかのようなケースばかり見てるんだ、身内の死をどうしても理解できないのは人間として正常なことだといってた、ことにうちのような場合は」

「あなたはどうかなのよ、あなただって」

はるかは口ごもった。食卓を拭きかけたままやつれた横顔を見せて肩を落している。

「いつまでもくよくよしてられないよ、元気をだしてくれなきゃばくだってねえ」

「磨左夫さん」

しばらくしてはるかとは低く呼びかけた。手にした布巾をテーブルの上で畳んだり広げたりしている。「どうしてそんなふうを考えるの、そんな考えかたいやだ。あなた、さっき正常だっていったじゃないの、わたしはねえ、いつまでも磨乃のことを忘れたくないのよ、忘れられないんじゃない、なくて、忘れたくないの、だからお舅さんが磨乃の部屋のことを気にかけたりするのだって……」

我慢できないのだ、とはるかはきっぱりいった。

「邪魔されたくないのよ、さつきだって、よいなお世話よ、なにをいったかしらないけど、わたしのことが頭がおかしいって思ってるんでしょ、未婚のさつきになにがわかるのよ、あのひとは磨乃のことでさんざん泣いてからなんていったと思う、事故の朝のタイミングを掘り下げてみようって、こまごまとききたがったわ。いうことが過激よ、魔のタイミングっていったのよ、どこにそんなものがあつたっていうのよ、磨乃はいつものように、前の日とおなじ顔をして、ママいってまいりますって手を振ったのよ、ひとりで通園できるのが得意で……」

わかったと磨左夫はうなずいた。もういい、その話はよそう。

はるか唇を噛みしめて視線を落すと、ふと忘れものを思いだしたように頬をゆるめた。

「あの子のマグ大きすぎてね、牛乳をたっぷりいれると重くなっちゃうから、ママ七分目にしてねっていうのよ、六分目とか八分目とか、あの子そんな言葉おぼえたものだから、手がちいさくて、両手でマグをかかえるようにもって、顔がほとんど隠れちゃうんだもの」

ちらっと笑ってから、はるかはさっと表情を曇らせた。

「思いださないほうがいいかもしれないけど、そんなことできるわけがない、もしあの子を思いださなくなったらどうしよう」

磨左夫は黙ってテーブルを離れると、寝室に入る前に策造を見舞った。このところ離れに引きこもりがちの策造は、どうやらおれも老人性鬱病らしいといって、息子を苦笑させた。夕食も運ばせてひとりですましている。通い盆の食事にもほとんど手をつけていない。きちんと食べないとだめじゃないですか、と息子に叱られて彼はうんうんとうなずいた。

「はるか、昼間どんなふうですか」

策造はそれには応えずに電気ストーブから鉄瓶をおろして、煮えたぎる湯を急須に注いだ。

「こども部屋のことではにか……」

「そのことなら、余計なことをいってすまなかった、ひとつひとつ片付けなくてはいかんといひ口をだした、母親の氣持を察してやらにゃ」

「父さん、あの部屋を明けようか」

「いや、そういうことじゃない、二階は億劫だ」

「そんなことないでしょう、便所もあるし階段に手摺もついている、不便なことはないと思うけどね」

策造は、自分で淹れた茶をすすった。濃いお茶を飲むと眠れませんよ、といいおいて磨左夫は夕食の盆をもって戻った。

鳶が一羽風にながされて舞っている。はるかはそれを見上げている。すぐ頭の上を飛んでいる

ように見えるが、大きさからするとかなりの上空だろう。風が強いとみえて翼を広げた鳶は面白
いようにふわっと流されている。輪を描いているように見えるけどあれは風に乘って遊んでいる
のだ、とはるかと思う。あんなふうに遊べたらいいのに。

磨乃ともよくこうして飛ぶ鳥を見あげた。あるとき磨乃は空をさして叫び声をあげた。「ママ
見て、鳥さんたちが裏返しになったわ」鳩の大群が一枚の布のように群れをなして飛ぶのは壮観
だった。それが布を翻すようにいっせいに方向転換をするのを、磨乃は目敏くとらえたのだっ
た。

あの子がいなくなって七カ月が過ぎた、なにか仕事でも探さなくてはとはるかと思う。磨左夫
が心配するのも無理はない。家のなかにこもっているうちに、花の季節も終って茶室の軒端に吊
してある羊歯しだの葉が盛大に繁っている。

磨左夫にひとりごとを注意されてから、はるかはつとめて気をつけるようにしている。いわれ
てみればやはりおかしいと思う。

須麻子が電話をかけてきた。

「あいかわらず元気がないのね。小品だけどいい絵が描けたのよ、もってってあげる」

「うれしいけど、只ではいただけないわ」

「そうよ、わたしの絵は結構いいお値段がつくからね」

電話が切れてからも、はるかは耳の奥に須麻子の声をきいていた。「とてもいい絵よ、自画自
讃」と、おっとり笑う声がいつまでも消えない。のびやかに話す須麻子の声が、はるかには懐か
しいひびきをのこしている。

受話器を手にしたままはるかには、ガラス窓の外に空を見ていた。そしてふっと脳裏をよぎった思いにじっと息をつめた。雨宮さんに会ってみようかしら……。

策造が庭にいる。薔薇の手入れをしているのだ。土地を掘り下げた半地下のガレージの上がちよっとした花壇になっていて、四季咲きの薔薇が咲いている。後ろ向きにしゃがんでいる彼の背に西陽があたり、黒い影がながく伸びている。

年老いた彼の背に磨左夫が重なって、はるかはいっとき思いを凝らした。父と息子はよく似ている。土に向かって背をかかめているいかつい肩の線がそっくりだ。あんなふうに磨左夫も齡をとっていくのだろうか。いっそひと思いに歳月を飛びこえてしまいたい。そうすれば子を喪くした無念さから抜けだすことができるかもしれない。

作業用の小椅子にかけていた策造はよろりと腰を上げた。薔薇のつぎは紫陽花だ。咲きはじめて繁みに手を入れている。作業用の椅子は彼自身の手造りで小さいところが磨乃のお気に入りだった。木製の三脚椅子で楕円形の座面は、策造の手で一面に鳥や花の彫刻で飾られている。あの椅子に腰かけて磨乃はひとりよく遊んでいた。草花や蟻の行列に話しかけている磨乃が見える。

製薬会社の研究所長を引退してから、多趣味な策造は結構豊かな老後を過ごしている。植木の剪定や日曜大工は、地域の生涯学習の教室にまめに参加して習得した。それも七年前に妻に先立たれてからのことである。なによりも先立つものは健康だといって、一時は市営の温水プールも利用していた。須麻子にいわせると、そんな策造のライフスタイルは老人の鑑だそうだ。「あの方のような立派な老後はそうそう見あたらないわよ」という。